

## R6年産大豆子実の主要病害虫による被害状況

茨城県病害虫防除所の調査によると、令和6年産大豆子実の病害では、紫斑病、ウイルス病の被害粒率は平年並、べと病の被害粒率は平年より高くなりました。虫害では、吸実性カメムシ類、マメシクイガによる被害粒率は平年よりやや高く、フタスジヒメハムシによる被害粒率は平年より高くなりました（茨城県病害虫防除所 ([pref.ibaraki.jp](http://pref.ibaraki.jp)））。

発生が多かった圃場では、下記を参考にして次年度の病害虫対策を実施しましょう。

### 防除対策

防除薬剤については7月24日付営農 News 第3169号

(<https://www.zenoh.or.jp/ib/contents/make/einou/3169.pdf>) を参照してください。

#### 紫斑病

- ・茎葉を含む被害残渣は適切に処分し、被害が多発した圃場では連作を避ける。
- ・種子更新を行う。
- ・防除適期は開花期の20日後頃である。
- ・開花期から成熟期までに連続した降雨がある場合は、開花期の30日後に追加防除を行う。
- ・2回目の防除を行う際は、1回目の薬剤とFRACコードの異なる薬剤を散布する。
- ・収穫が遅れると発生が多くなるので、適期に収穫する。



写真1 子実での発病 (紫斑粒)

#### べと病

- ・茎葉を含む被害残渣は適切に処分し、被害が多発した圃場では連作を避ける。
- ・種子更新を行う。
- ・密植を避け、風通しを良くする。
- ・防除適期は開花期～子実肥大期である。



写真2 子実は菌糸で覆われる

#### ウイルス病

- ・種子更新を行う
- ・生育初期にウイルス病に感染すると被害が大きくなることから、媒介虫であるアブラムシ類を早期に防除する。
- ・発病株は早い時期に抜き取り、処分する。

#### マメシクイガ

- ・成虫の移動性が低く発生圃場で繁殖・越冬するので、連作を避ける。
- ・防除適期は産卵最盛期～その約10日後である。(大豆の生育ステージとしては、莢伸長終期～子実肥大初期頃にあたる。)



写真6 莢内の幼虫と糞

#### フタスジヒメハムシ

- ・収穫後に枯葉の処理と耕起を行い、翌年の発生を抑える。
- ・薬剤防除は子実肥大期にカメムシ類と同時防除を行う。

#### 吸実性カメムシ類

- ・薬剤防除は莢伸長期以降、発生に応じて7～10日ごとに複数回行う。
- ・幼虫も子実を加害しながら成長するため、幼虫の発生状況にも注意する。



写真3 ホソヘリカメムシ幼虫



写真4 アオクサカメムシ幼虫



写真5 イチモンジカメムシ被害

写真 1,2,6 茨城県病害虫防除所

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 News は JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。